多賀小

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成
～一人一人が考えをもち、表現できる授業づくり～

（２年計画の１年次）

校長　　安田　俊彦

１　研究主題について

本校では、教育目標「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」を掲げ、それを受けて努力目標を「考える子・やさしい子・すこやかな子」としている。また、めざす児童像を「主体的に学び合い考えを深める子・素直な心をもち自他を大切にする子・健康な生活を送り心身ともにたくましい子」とし、知育・徳育・体育の各部会が具体策を提案し、職員全体の共通理解の下、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図っている。

昨年度は、主体的な伝え合い・学び合いを支える手立や工夫として、算数科において、発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示することに取り組んだ。また、３年間継続して導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに取り組んできた。

その結果、児童に疑問や課題への意欲をもたせ、必要感をもって課題に取り組ませることができたことが成果として挙げられた。話型などの提示は、話すことが苦手な児童にとっては有効な手立てとなり、進んで伝えようとする意欲へとつながった。また、単元ごとに話合いの根拠になる材料を蓄積し、それを使って説明する時間を設定することで、進んで伝え合う力が育ってきた。

しかし、課題把握の場面でのつまずきや自力解決での個人差により、伝え合いに時間が多くかかって学び合いがうまく進まないという実態が明らかになった。個に応じた指導を、よりよい学び合いにつなげられるよう研究を深めていく必要性が挙げられた。

そこで今年度は、昨年度までの研究を踏まえながら、一人一人が意見や考えをもち、表現できる授業づくりに取り組むこととした。これまで取り組んできた導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続することによって、本校の課題を解決していく。また、昨年度、研修で取り組んできた１人１台端末活用の授業における効果的な活用についても実践を重ねていきたい。授業研究での成果を日常の授業実践に生かし、進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子を育成するための学習指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

導入・課題設定の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続し、一人一人が意見や考えをもち、表現できる授業づくりについて研究を進めることによって、「進んで伝え合い、共に学び合う子」の育成につながることを検証する。

４　研究内容

(1) 主体的に学習に向かわせるための必要感のある課題設定の工夫
　ア　発問や事象提示の工夫
　イ　見通し、解決に向けた場の工夫
　ウ　振り返る場の設定（仲間との対話、自分との対話）

(2) 一人一人が意見や考えをもち、表現するための工夫
　　（特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり）
　ア　気付きや思考の根拠をもたせる活動の設定
　イ　伝え合うための手立てや共感的な態度で学び合う場の工夫
　ウ　効果的な１人１台端末の活用

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
７	１３	第１回授業研究（２学年）授業者　根城　悠紀子　「図を使って考えよう（１）」
９	１５	第２回授業研究（５学年）授業者　中野渡　大樹　「整数」
１１	１１	教育指導課・総合教育センター訪問　全学級授業
１１	１８	小・中ジョイントスクール推進事業　授業公開

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	１ １５	救急法Ⅰ　講師：エスプロモ株式会社 救急法Ⅱ　館長　下田　尋通　氏
６	２９	気になる子へのアドバイス　講師：八戸学院短期大学部　幼児保育科 教授　野口　和也　氏
８	３１	県学力状況調査の分析・考察
９	５	道徳科における指導と評価の一体化　講師：教育指導課 主任指導主事　大野　勉　氏

６　研究の成果

(1) 子どもたちの身近なことに関連付けたり、取り組みやすい内容に問題を変えたりすることで、必要感や問題意識をもち、意欲的に取り組む姿が見られた。また、学習のポイントをしぼり思考にずれを生じさせ、「なぜ」を大切にする授業を心がけたことは、主体的に学習に向かわせることにつながった。

(2) 共感的な態度で学び合う場の工夫を継続したことで、発表時に発表者に体を向けたり、反応したりする児童が増えた。友達から学ぼうという姿勢が見られた。また、ペアや少人数で話す場を設定することで、発表が苦手な児童を参加させることができ、共に学び合う姿に近づいてきた。

(3) ネームプレートの活用やジャムボードなど、一人一人に意見や考えをもたせるための効果的だった工夫を職員間で共有した。その中で、各学級の実態に合った取組を行い、考えを表現する力が育ってきた。

７　研究の課題

(1) 進んで考えを伝えたいという意欲が高まってきたと同時に、考えを整理して話すことができず、まとまりのない伝え方になってしまうという実態が明らかになった。今後は、さらに相手意識をもたせるなど、伝え方についても研究を深めていく必要がある。

(2) 一人一人が意見や考えをもち、表現するための工夫として、１人１台端末の活用にも取り組んできた。有効な部分がある一方、予定より時間がかかったり、めあてが達成できなかったりするという課題が挙げられた。普段から扱いや使い方に慣れさせる必要性を感じた。さらに有効に活用するために、情報交換や研修を継続していく必要がある。

（　記入者　　石塚　里佳　）